

## 特別支援教育における社会科指導等の国際比較

柴崎 功士・藻利 国恵・金子 俊明・間々田 和彦  
呉 純慧（台北教育大学）・大部 令絵（埼玉県立大学）

本研究は当初、日本と台湾の中学一年生段階の地理の指導案について比較検討を行い、それぞれの指導に役立てようという狙いを持ってスタートした。しかし、実際に指導案を比較すると、扱う内容や指導法にあまりにも大きな違いが存在するという現実と直面した。そこで、指導案の比較のみならず、教育全体における特別支援のあり方や聴覚障害教育の国ごとの位置づけ、社会科という教科に対する国や社会のニーズ、障害者を取り巻く教育的及び社会的環境といった背景などについても同時に検証・考察することで、これからの指導に対するヒントや指針が見えてくるのではないかとという観点で議論を進めることになった。昨年度に行った3回の協議内容及び全日本ろう教育研究会での発表を振り返り、今後の課題や発展について考察する。

キー・ワード：国際比較 社会科 学習指導案 社会環境 特別支援教育

### 1 はじめに

聴覚障害児教育においては障害に応じた配慮を行い、いわゆる「準じた教育」の中で最大限の成果を求め、様々な試行錯誤が成されてきた。学習指導案は指導上の工夫や配慮、試行錯誤や成果の上に成り立ち、日々改善されてきたものと考えられる。グローバルに学習指導案を比較することで、普遍的な方法論やより良い指導法へつながるのではないかと期待を持って本研究はスタートした。だが、協議を進めるうち、学習指導案以前に、生徒のレディネスや社会環境、特別支援学校の位置づけや現状など、成果や指導法に影響を与える条件が多くあることに改めて気付かされ、これらを見捨てて指導案のみを比較することはできないということとなった。そこで改めて社会背景を踏まえた上で討議することが確認され、指導案に現れる諸処の違いについても、その背景について同時に意見交換及び考察を重ねていくこととなった。

### 2 研究目的・概要

台湾の聾学校と日本の聾学校の社会科の学習指導案の比較・検討を行うことにより、両国の聴覚障害教育の現状を把握し、アジア諸国の聴覚障害教育

に生かすための教育方法などを模索する。さらにそこから発展して、社会・教育制度の違いや障害者の社会的立場を考慮に入れた、より良い教育法・指導法について探ることを目的とした。

### 3 研究協議の開催

#### (1) 第一回協議会

（中一地理分野の学習指導案に関する協議）

2015年3月26日に本校中学部において第一回の協議会を実施した。本校中学部からは主事の金子、社会科から藻利・柴崎の二名が参加し、埼玉県立大学からアジア各国の特別支援教育事情に明るい大部令絵先生に参加いただいた。指導案の翻訳を担当していただいた呉純慧先生には台湾の教育事情に通じているため協議にも参加していただいた。

協議では、日本が人々の生活を中心とした観点で学習を進め、教員と生徒や生徒同士のやりとりを重視し、特別支援教育諸学校が比較的独立して専門的な教育を行っているのに対し、台湾は学術的なアプローチが強く、内容はより専門的で、教員が生徒に知識や情報を授ける講義スタイルが中心であることやインクルーシブ教育がメインであることなど、両国の教育事情について多くの違いが参加者から

指摘された。また、参考事例としてインドネシアの社会科の授業の様子なども紹介されたが、国によって何を重んじているかということが教科で取り扱う内容や指導法、指導案の様式に影響を与えるのではないかという推論が立てられた。また、指導案の比較という点では、指導案そのものの相違点が多に多いことが確認された。ミクロな視点からの比較として、内容が似た指導案同士を比較すれば良いのではないかという意見も出たが、むしろ二つの全く違った指導案の背景にある、国家の構成や成り立ち、国の教育指針（指導要領）、教育資産、特別支援教育のあり方、障害者の置かれた立場などのマクロな視点からも比較していくことで、それぞれの国や学校にあった指導法が見えてくるのではないかという方向性で協議を進めることが確認された。

## (2) 第二回協議会

2015年8月28日、本校中学部において2回目の協議会を実施した。参加者は1回目と同じであったが、呉先生は台湾に帰国されたため、skypeを利用しテレビ会議の形式をとった。

第一回の協議の流れに沿い、カリキュラムや評価の方法、各国の社会情勢、特別支援教育のあり方などについて積極的な意見交換が成された。前回台湾から提示された指導案は、著名な教員が作成したモデルケース的なもので、日本で言うところの指導書に近いものであることが情報交換の中で明らかになり、実際には指導する教員によって指導案の形式も様々であることも確認された。新たにわかったことも多くあり、第三回目の協議に向け、「レディネス」「単元目標」「教材」「評価」「指導方法」等の国際比較マトリクス表を作成することとした。マトリクス表の作成に当たっては、埼玉大の大部先生にフォーマットを用意していただき、本校サイドで若干のアレンジを加えたものをたたき台として用意した。日本の様子を書き込んだ後、呉先生に依頼して台湾の様子を記入していただいた。

## (3) 第三回協議会

2016年1月14日に三回目の協議を行った。カンボジアでの指導経験を持つ間々田が加わり、前回と同じくskypeを用いたテレビ会議の形式をとっ

た。日台のみならず、他のアジア諸国での教育事情も併せて比較することで、日本・台湾それぞれの特徴が浮き彫りになることが期待された。協議はマトリクス表に基づいて進められ、他のアジア諸国の情報も交えながら、改めて両国の特別支援教育及び聴覚障害教育を取り巻く環境について、さらに深い情報と意見の交換が積極的に行われた。



図1 テレビ会議の様子

マトリクス表からも分かるように、単元目標、指導上の留意点、評価、指導方法、聴覚障害に対応した教授方法などには大きな差異が認められる。この点を把握した上で、指導案を見ていく必要性が明らかになると共に、より良い指導法についてもこういった背景を勘案しながら協議しなければならないことが確認された。続いて、マトリクス表には反映されていない両国の社会的、教育的環境についても活発な意見交換がなされた。以下に台湾の状況を述べることにする。台湾では、現在12年義務教育への移行に伴いカリキュラムの変換期にある。聾学校や特別支援学校に通うのは障害の重い人というような風潮があり、大多数の生徒は一般の学校に通う傾向が強い。(2014年度小中高の障害児童・生徒数109,386名のうち、特別支援学校に通う生徒が6,367名(5.82%);一般の学校に通う生徒が103,019名(94.18%)。台湾文部科学省調べ) 実際に行われている授業のレベルも一般の学校とは異なる。一方、障害のある学生へのサポート及び学習機会の提供についての制度は確立されており、進学率も高い。特別支援学校同士のネットワークの拠点としてはリソースセンターが聾学校内にあり、大学には支援

室が設置されている。(2014 年度台湾の 165 大学中、支援室(資源ルーム)が設置されたのは 95.2%にあたる 158 大学。)一般校に進学した場合には、担任の他に特別支援担当の教員や専門職によるサポートがある。学校内での障害児の孤立に対しては、障害児同士のネットワークを構築するためのキャンプが国主導で実施され問題解決に寄与している。進学のための推薦制度も確立されており、障害者の枠がしっかりと確保されている。しかし、大学を卒業しても十分な知識やスキルが身についておらず、就職できない者も多いことは課題となっている、等である。初めて耳にする情報に驚くことも多かった

が、日本でも制度として見習うべき点もあると感じた。確かな学力を身につけるという点では、日本の方が細やかな指導が行われているようにも思えるが、国家として統一された指導法というわけではなく、学校や実際に指導を行う教員に委ねられている部分が多くあると考えられる。日台両国の課題を把握し、それぞれの良さを取り入れることでお互いに状況の改善につながる可能性が感じられるが、政治や経済、国家の歴史や文化など異なる点も多く、取り入れ方には工夫が必要であり、どちらかの国で有効であることが他方ではそうではないということも十分に考えられるのではないだろうか。

表 1 国際比較マトリクス表 (社会科, 中一地理)

| 国     | 日本  | 台湾   |
|-------|---|--|
| 学年    | 中学部 1 年   | 中学部 1 年  |
| 教科    | 社会科 (地理)  | 社会科 (地理)   |
| 授業時間  | 週 3 時間 (年間を通じ地理 4 : 歴史 3 の割合で配分)  | 週 2 時間   |
| レディネス | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 基本的な日本語の読み書き能力</li> <li>・ 初歩的な手指コミュニケーション</li> <li>・ 基本的な気候や地形の知識。</li> </ul> ※学力の個人差は大きい。 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 基本的な読み能力。</li> <li>・ 基礎的な手話で意思を伝達し、理解する能力。</li> <li>・ 緯度と気候帯の概念。</li> </ul> |
| 単元目標  | 自然環境、文化等の地域的特色を理解する。  | 各単元ごとに理解すべき項目を設定 (気候、水文、自然生態と環境保全についてなどの単元それぞれに 4 ~ 5 項目) 各単元目標に「認知」、「感性」、「技能」の目標を設定                                 |
| 教材    | 教科書、地図帳、資料集、自作教材 (紙板書・デジタル視覚教材 等)   | パソコン、プロジェクター、PPT、映画等   |
| 指導方法  | クラス単位で一斉指導 (均質学級)。講義、調べ学習、発表等   | クラス単位で一斉指導。教員が生徒に知識や情報を授ける講義スタイル   |
| 評価    | 試験による点数およびそれを基準とした 5 段階評価 及び 知識・理解、関心・意欲・態度、技能・表現、思考・判断の評価  | 「単元授業評価表」によって評価を行う。評価方式はペーパー試験、観察評価、操作テスト、口頭試問、その他の 5 つ。評価基準は 5 段階、支援程度は 4 段階 評価結果は通過と不通過の 2 種類。                     |

|               |   |                                 |
|---------------|---|---------------------------------|
| 指導上の留意点       | 教員と生徒、生徒同士のやり取りを通じた理解の深まりを重視。覚えることだけでなく考え、自分なりの視点を持ち考察を深めていくことに力点を置いてすすめる。発言しやすい雰囲気づくりに努め全員が参加できる授業を心がける。 | 特に示されていない。                      |
| 聴覚障害に対応した教授方法 | 教室の机の配置（馬蹄形）、手指を用いたコミュニケーション、集団補聴システムの利用、視覚教材の多用、I C Tの活用など。用語の解説、語彙の不足、社会通念の欠如や不足に対する手当 等                | 評価するとき、手話法と口話法を行う。他には特に示されていない。 |
| 支援体制          | 聾学校が地域のセンター的機能を果たす。   | 聾学校が地域のセンター的機能を果たす。             |

#### (4) 協議のまとめ

制度が充実して障害児教育・障害者支援の枠組みが確立された台湾と、特別支援学校でも一般校に準じた教育を行ない、確かな学力を身につけさせようとする日本。指導案の様式や内容の違いはその違いの表れともいえるだろう。単に学習指導案や教え方というだけではなく、なぜそういう教え方をするのか、なぜその内容を学ぶのかといった、指導案の違いの背景にあるものについても、もっと広い視点で考え、それぞれの国の良いところを取り入れる必要があると実感した。教育が社会のニーズに応えるものであるという事実から考えるに、学校や教育界を取り巻く環境や様々な問題についても考えなくてはならないことは、ある意味当然とも言えるのではないだろうか。聴覚障害児が確かな学力や社会性を身につけ、活躍できるための教育及び社会環境の実現に尽力するとともに、実際の指導では現状の制度・環境の中でより良い授業作りをしていく努力もしていかななくてはならないと今回の協議を通じて改めて感じた次第である。今後さらなる協議と考察を深め、より実りある実践としたい。

#### 4 成果と課題

全日本ろう教育研究会では国際教育部会で発表を行った。国際比較というテーマに関しては、助言者の大沼先生より非常に意義があり面白い実践な

ので、継続して行って欲しいという評価をいただいた。

今年度は、発表の報告とこれからの協議の方向性について話し合う場を二月中に持つ予定となっている。これまでのところで分かってきた、教育方法や教育内容が社会の在り方に大きく影響を受けているという点について、どのようなスタンスで向き合っていくのかという点や、状況の改善に向けて教育現場だけで考えるのでは限界があるという点など、よりよい教科指導や教育実践に向けての課題・問題は山積しているが、より広く意見を求め多くの人間が関わることで解決に近づくものと考えられる。

本研究は参加いただいた諸先生方の協力を得て成りたったものである。感謝しつつ、より良い成果に向かって今後のさらなる協力をお願いしたい。

#### 〔参考文献〕

- ・シャオ・ユーエン、池本喜代正(2007) 台湾における障害児の個別化教育計画に関する一考察. 都宮大学教育学部 教育実践総合センター紀要, 第 30号, 207～215 頁
- ・教育部(2015)104 年度 特殊教育統計年報. 台北